
棚から大 明 神

高原冬也

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

棚から大明神

【コード】

N0336Q

【作者名】

高原冬也

【あらすじ】

大の妖怪好き、十三端雄也はかつていい男になるのを夢見ていた。剣道の稽古を終え、家の和室の戸棚から真珠みたいな小さな珠を見つけた。その中にはなんと妖怪「火天女」なる女、蓮華が封じ込められていた。雄也は妖怪に遭えたことに歓喜し、すぐに家族の一員にする。その蓮華は学校にまで出沒し、雄也は蓮華に人間としての常識を教え、蓮華は妖怪の知識や対策を教え、雄也を鍛えながら生活していく。

一節 柵から大明神（前書き）

初めてなものでどう評価してもらえるか、実際ドキドキしております。妖怪は自分のオリジナルやお馴染みのもいっぱい出るので、読みやすいと思います。設定は大半オリジナルでガンガン突っ走ります！

一節 柵から大明神

今、日本は世界的景気悪化に伴い就職氷河期なんて言われる、不景気のド真ん中を突っ走っている。しかしそんな中、不景気なんてもろともしない素晴らしい会社が存在した。東京都三鷹市新川4-44-4にある、『喪乃黒製鉄所』である。

「雄也、電話取って。多分お得意様だと思っから」

「ほい」

この電話を取った少年は十三端雄也、地元の進学校に通う少し変わった高校1年生だ。変わっているところはどこかって？見ればわかるぞ。

「最近いろんな妖怪モノがあるけど、やっぱり鬼太郎だよな。これぞ妖怪を世に知らしめた名作って感じるしな。今度DVD買ってこよう、そうしよう」

そう、彼は大の妖怪ファンなのだ。昔から鬼太郎を見ていて、鬼太郎みたいなかつこいい男になりたいとずっと憧れ続けていた。様々なスポーツのパフォーマンスをトップレベルまで練り上げ、剣道に至っては世界大会にまで出場したスポ根野郎である。

「あつ、道場行かないと！今日からボクが師範代やるんだった！」

雄也の通う道場は、父の武勇が師範をしている。歳には敵わず、雄也が跡を継ぐことになっていた。父も剣道で世界大会に出た実力者だ。

「え、今日から父が変わって師範代をする十三端雄也です。稽古は以前より厳しく、充実してやっていますので皆さん、そこところは覚悟してください」

早速新しい師範代の稽古が始まった。開始5分もしないうちに檄が飛び、弟子たちは早くも息が上がってしまったようだ。

「師範代、や・・休ませてください」

「アンタらそれでも、父の弟子かああ！」

稽古も無事終えて、雄也は家路に着こうとしていた。

「今日も稽古がんばったよ、帰ったら飯食って寝るか」

20分程経ち、雄也は家に着き和室でゴロンと横になった。その和室にテレビはなく、あるのは古びた戸棚だけだった。

「これ何年前に買ったんだ？父さんは20年以上前って言ってたけど」

雄也は無性に戸棚を開けたくなくなった。今まで中身を見たことがなく、いつも鍵がかけられていた。

「お、今日は開いてる」

雄也は戸棚から、小さな真珠みたいな物を出した。色は白く、ビニールに包まれているその珠の秘密を何としても知りたくなった。

カッ

「うわっ、何だ!？」

なんと珠が眩いばかりの光を放ち、パリンと砕けた。その珠のあった所には、一人の女が立っていた。

「やっと出られた、主も余計なことをしたものです」

雄也はあんぐりと口を開けていた。その容姿の端麗さもさながら、体から神々しいオーラをこれでもかと放っているのだ。

「アナタが主の子孫にあたる、雄也様ですね？ワタシは浅草守恩神あさくさもおんのかみ、違う違う。蓮華れんかと申します」

「は、はあ」

雄也は戸惑いながら薄っぺらい返事をした。雄也は、どうして出てきたのかを聞いてみた。

「それはこの西暦2011年、この年が妖怪がもつとも凶暴に活発に動き回る年なのです」

「でもボクが開けなかったら、キミ出られなかったんじゃない？」

神様沈黙。それを見た雄也は笑いながら言った。

「イヤイヤ、ボクは数奇な運命の持ち主だね。大好きな妖怪が実在してるなんて驚きだし、柵から神様が出てくるんだもん。他にはいないよ絶対」

蓮華は雄也の様子を見てホツとした。もつと驚かれて追い出されるのかと思いきや、妖怪に巡りあえたと大喜びされているのだから。

「ねえ、その腰の長い何だい？」

雄也は、蓮華の腰に巻きつけられた筒状の物を指差した。

「これは妖刀です。妖怪は力が大なり小なり、必ず妖刀を身につけています。ワタシは妖怪『火天女』、お裳女の娘です。母はご先祖様の世話役をしております」

「へー、妖怪好きには新説だね。妖怪の新事実がわかつちやったよ」

雄也は家族にも紹介しようと、蓮華を強引に居間へ連れて行った。

「今日からこの家に居候する、大明神蓮華様です！」

「おおー、ナイスボデイの神様だ、かはっ・・・」

武勇の汚い発言を母の常子が肅正した。蓮華は予想外の歓迎ぶりに、目から大粒の涙を流した。

「よ、よろ、よろしくお願いいたします」

常子は電話を取り、どこかへ電話した。

「もしもし、十三端ですが」

翌朝、雄也は颯爽と学校へ走った。周りの女子からガンバレコールを浴び、男子からは死ね死ねコールを浴びた。

「今日は転校生が来ています、入りなさい」

「はい」

雄也は過剰に反応した、否、反応せざるを得なかった。何故ならその転校生というのが……。

「本日付けでこの学校に転入しました、三島谷蓮華みしまやれんかです。皆さんどうぞよろしくお願いいたします」

「母さん、電話してたのこの学校だったのか……」

男子は既に釘付けにされていた。雄也もそのうちの一人だった。そして、蓮華は雄也の隣の席へ座ったのだった。

「よろしくね」

雄也はテンションMAX、その陽気な笑顔に蓮華もつられて笑った。さてさて、この先どのような学校生活が始まるのか。それは次回のお楽しみに。

一節 棚から大明神（後書き）

本日の妖怪

火天女・・・無実の罪を犯した男の妻が自害し、その恨みが人の形を象って生まれた妖怪。容姿端麗だが、男を見境無く火で焼き殺し食ってしまう。稀に恋愛成就の神様として祀られていることもある。

二節 河から化け猫(前書き)

2話目ぶち込み。評価とコメント、感想待っています！

二節 河から化け猫

蓮華が雄也の学校に転入してきて1週間、当の本人も少しずつだが人間の常識を理解し始めていた。

「いいかい、くれぐれも妖怪としての本性を出しちゃいけないよ。わかってるね？それと、ボクと話す時は敬語なんて使わなくていい。使われるときこちなくて仕方ないんだ」

「は、・・・うん、わかった」

蓮華は案外呑み込みが早かった。その早さに雄也も少し驚いていた。さつき雄也が本性を出すなど言ったのには、ちゃんとした理由^{わけ}がある。それは昨日の晩のこと・・・。

『今日はチゲ鍋よ』

『『いただきます！』』 『いただきます』

昨日の晩御飯のチゲ鍋、それが全ての元凶だった。

『ごほっ、ごほっ・・・げふんげふん！』

なんと蓮華は、誤って右手から火を出して机を鍋ごと燃やしてしまったのだ。この時十三端家は、妖怪の凄さを痛感させられたのだ。

「よーし、今日も張り切って行ってみよー！」

蓮華は上機嫌だった。昔は友達と呼べる者がいなかったせいか、クルスメイトの存在は彼女にとって新鮮なものだった。

「もうお昼だね、一緒に食べよ」

お昼になると必ずと言っていいぐらい、蓮華は雄也と弁当を食べていた。しかも時代が違うハズの蓮華が、弁当を作っちゃっているのだ。その後は普通に授業を受け、放課後になった。

「ふう、学校終わった。帰ろう蓮華」

「うん」

ムニイ

雄也は顔が赤くなった。いくら妖怪の女とはいえ、くっついて歩くのは恥ずかしかった。しかし蓮華は雄也のその気持ちも知る由もなく、さらにくっついてきた。その光景はもう、『地元の名カップル』と街中から持て囃された。

「も、もう家だよ。離れてくれよ」

「いいじゃない、中に入ったら離すわよ」

家の中に入ったら入ったで、『爆裂妖怪抱擁絞殺』ばくれつようかいハグクラッシュが炸裂してしまう始末なのだ。幸か不幸か、自分にはわからない状況に雄也がいるのは間違いない。

「あ、ニュースだ」

『次のニュースは、連続怪死事件の続報です。今日未明、江佐間広えさまこう大さん26歳が荒川の河川敷で白骨体となって見つかりました。傍には他の事件同様、大量の猫の毛が落ちていたの事です』

「猫の毛？と言えば化け猫、化け猫の代表格は猫又だよな」

雄也は妖怪フアンの血が騒ぐのか、部屋中を跳ね回っていた。

「雄也、『荒川の大黒猫』って知ってる？」

「え、そんなの聞いたことないけど・・・」

雄也は妖怪フアン故に、様々な妖怪の伝承を知っていた。が、本物の妖怪の知識には敵わなかった。

「昔ね、荒川にたいそう猫嫌いな地主が住んでいたの。猫を見かけたら銃を放って殺しちゃうくらいのトンデモな男が。でも反対に息子は、猫が大好きだった。息子は一匹の黒猫を地主に黙って買っていたんだけど、ふとしたことでそれがバレて猫は殺されてしまった。息子は地主の掟？みたいなもので山奥の空き家に追いやられて死んでしまったの。そして息子の死後、地主の家では夜な夜な猫の鳴き声が聞こえるようになってどうもそれが、奥さんの部屋からだったみたいなの。地主が部屋を覗くと、そこには奥さんの着物を着ている殺したハズの黒猫だった！奥さんは黒猫に食われて体を盗られたのよ、無論その夜地主も黒猫に頭から食われてしまった・・・。これが『荒川の大黒猫』よ」

追加すると、その後も大黒猫は猫を嫌う者たちだけ食らった。あく
る日、屈強な僧兵の集団が訪れて大黒猫を退治してしまったとさ
れている。

「猫って怖いな、不幸を呼ぶとか言われてるし。人間も怖いけど」
雄也は猫よりも、猫を被った人間の方が怖いと感じた。

「んしょつと、猫又退治行きますか。マタタビ携え、いざ出陣！」

雄也と蓮華は、猫又の出没地の荒川まで行った。もう夜の8時を過ぎたが、二人とも高校生だ。両親は無事に帰ってこいよと、二人に手を振り見送った。

「猫又ってどんだけ強いのか？」

「猫又は比較的、そんなに強い妖怪じゃない。でも猫又の吐く息には気をつけて」

息に気をつけろってどういうことだ、と雄也は思いながら河川敷でじっと待っていた。そして2時間以上待った頃だろうか、急に猫たちざわめき始めた。猫又が現れる合図だ！

「ぐにゃあああっ！」

「出たな、ボクのマタタビ木刀受けてみるっ！」

「バチイイーン！」

妖怪と言えど、猫。マタタビ塗りたくりの木刀に叩き落された。蓮華もすかさず斬りかかろうとするが、雄也に止められた。

「初めてのVS^{たい}妖怪、ボク一人で十分さ」

「甘いな青二才が！これでも喰らえい」

ブワアアッ

猫又がムクリと立ち上がり、雄也に息を思い切り吹き掛ける。息を全身に浴びた雄也は、なんと鼠の姿にされてしまった。こうなると敵は猫又だけではない、その周りにいる猫たちも敵となってしまうのであった。

「「ニニヤ〜〜！！」」

「ゴメン蓮華、キミの言うとおりだったよ！後でちゃんと謝るから、早く猫又を倒すんだ！！」

蓮華は猫から逃げる雄也の言葉をしかと受け止めた後、腰から刀を抜いた。

「雄也のため、オマエをこの場で鎮める！」

「んにゃ？妖刀かよ、ほんじゃオレ様も」

蓮華の妖刀は堂々とした日本刀だが、猫又の妖刀は刀と言うより鎌に近い。蓮華VS猫又の刃を交えた闘いが始まった。

「にゅおっー！」

ザブンッ

猫又は河に叩きつけられた。単純な力比べや技術など、その他もろ

もろ全て蓮華が上回っていた。が、それは猫又の策略だった。

「お助け〜〜」

雄也は必死で逃げ回っている、一刻も早く元の姿に戻すため蓮華は速攻をかけた。

「うおおおっ！」

「その刀は火の御剣、水には何の役にも・・・」

猫又の策略はこうだ。蓮華を河の中心に誘い込み、刀の力を封じて弄る。極めて単純だが恐ろしい策略だった。が、刀の火は消えるどころかますます強くなったのだ。

「こんな水ごときで、ワタシの闘志が消せると思ったかあああっつっ！！！」

ズバアアアアアアッ・・・・・・・・

「ぐにゅおあああっ！悲劇の火天女族めえ〜・・・・・・・・」

猫又は耳を塞ぎなくなるような断末魔を上げて、死んだ。

「すごいよ蓮華、猫又退治したんだね！・・・さっきは勝手に進んで、敵の攻撃に簡単に引つかかってキミに迷惑かけた。本当にごめんなさい」

元に戻った雄也は、蓮華に謝罪と感謝の念を込めて深々と頭を下げた。

二人が家に帰った時は、既に深夜1時を超えていた。両親はもう眠ってしまったようだ。蓮華がついでだからと、自分の妖刀について話した。

「ワタシのこの妖刀、白火花びやくわは母さんが死ぬ直前に残してくれた物なんだ。さつき火が河の水に触れても消えなかったのは、ワタシの闘志が消えなかったから。この刀の火はワタシの闘志の大きさに比例して、どんどん大きく、強くなっていくの。あれだけ強い火を放つたのは、ご先祖様を周りの妖怪狩りの連中から守った時以来だよ」

雄也はそれを聞いて、顔がポツと赤くなった。それを見て蓮華は笑いながら言った。

「別に雄也が好きなのじゃないよ、多分雄也じゃなくても助けたよワタシ。人間と妖怪、生まれは違えどもこの大地で育つたのには変わらない。ご先祖様がいつも言っていた言葉だよ」

雄也は深く息をし、その通りだと呟いた後深い眠りについた。

二節 河から化け猫（後書き）

本日の妖怪

猫又・・・化け猫代表と言っているほど有名な妖怪。永く年を生き
た猫が化け、黒猫が最強と言われる。超能力を使え、人を病気にし
たり殺すことができる。伝承では一晩に7、8人食い殺した猫又も
いるとある。

三節 遠方から友達（前書き）

今回は別の意味でバトルです。

三節 遠方から友達

荒川で猫又を退治した後、怪死事件はピッタリと止まった。世間では妖怪がやったのではないかという、大当たり過ぎる噂がしばらく流れた。雄也はこの噂で、蓮華が妖怪であることがバレてしまうことを恐れて蓮華を2、3日風邪という口実で学校を休ませた。

「危なかった、キミが妖怪だってバレたらボクらの生活を弾圧されかねないからな」

「もう噂は消えてるし、そろそろ学校へ行っても大丈夫なんじゃない？ワタシ」

蓮華は自分の普通の普通の学校生活の凄まじさに、全くもって気付いていなかった。体育では100メートルを8秒で駆け抜け、美術では描いた絵が全国のコンクールで受賞し、拳句の果てには先生の代わりに日本史の授業をしているのだ。雄也はまだ蓮華が人間としての常識を、完全に理解していないと悟った。

ブー・・・ブー・・・

「ワタシのケータイ、誰からだろ」

「いつの間にか買ったんだ!？」

蓮華は意外なところで人間味があった。オシヤレは勿論、ケーキやチョコレートなどの甘いものが好きだった。その時の蓮華は、とても妖怪とは思えないくらい女子高生らしかった。

「もしもし、ああ！久しぶり！元気してた？」

電話は延々と続き、1時間半まで及んだ。この長電話も実に人間らしい行為だ。アクション

「誰から？」

「春子はるこから。その子も妖怪で、古くからの知り合いなの。そうね、江戸後期くらいからかな」

やっぱり妖怪である。200年以上の間隔を『久しぶり』で片づけてしまうのだから。そんな芸当は、人間には不可能である。

「何の妖怪？」

「磯女」

雄也はゾクツとした。磯女は海の妖怪で、浜辺で人を襲う凶暴で狡猾な女妖怪だ。雄也は近い未来、女に取り殺されるのかなと、心の中でビクビクしていた。それ以前に、凶暴な妖怪に見合わない名前だった。

「その春子が今度こっちに来るって、電話してきたの。いいよね雄也」

「うん・・・わかったよ」

雄也は、せめて常識を心得てる妖怪であってほしいと強く願った。

6月のアタマ、ついに妖怪磯女がやってきた。

「邪魔するよ」

春子は、ジーパンに黒いTシャツの姿をしていた。雰囲気からして冷静な性格のようだ。

「あ、これが雄也。『あの方』の子孫なの」

「『あの方』の？十三端とみはじふせん風仙様のご子孫……。何というか、覇気がないね」

春子はどうやら、雄也の家系のことを詳しく知っているようだ。その後ろには、小さな影が映っていた。

「風仙様は立派な方だったよ、妖怪と人間の柵をあそこまで解いた方はいないからね。風仙様のおかげで、オイラたち妖怪はこうやって人間として人前に姿を現せるんだ」

「豆腐小僧か？バリエーションに富んでるなあ」

雄也は心の底では、覇気がないって何だよと何度もぼやいていた。その時ぼやきがうっかり、口から出てしまった。

「覇気がないって？そこのヤツと一緒にするなよ……」

「じゃ、この豆腐小僧へいたろうの豆腐を食ってみな。覇気があれば、食ってもカビなんか生えたりしないよ」

豆腐小僧の豆腐は、食べると体中にカビが生えるという超迷惑なお豆腐なのだ。ムキになった雄也は、その豆腐をまるごと1個飲み込んだ。

ポポポポッポン

案の定、カビが生えてしまい雄也は倒れた。それを見た三人は大笑いした。

「兵太郎、一発強いのかましてやりな・・・アハハハッ」

「うん・・・わかつ、イヒヒ・・・わかつた」

パチーン！

豆腐小僧のカビ豆腐から免れる方法はただ一つ、豆腐小僧の平手ビシタを受けることだ。

雄也はシヨックを隠せなかった。まさかまさか、豆腐を食べて倒れるなんて思ってもみなかったのだ。二人は家から出て行ったが、どんどん惨めになるばかりだった。

「気にすることないよ、あれは相当な覇気がないと食べれないんだし・・・」

「蓮華、今日は冷奴じゃなくて肉じゃががいって母さんに言うてくれ」

夕飯には約束どおり肉じゃががあった。豆腐のことを一刻も早く忘れようと、ご飯を三杯も食べた。

ブー・・・ブー・・・

「また春子からだ」

『もしもし、ワタシねお台場に引越してきたんだ。だから週末くらいに遊びに行くから、その時はよろしくって、覇気のない子に伝えてちょうだい』

雄也の心労はピーク、そして春子の言葉は雄也の精神をへし折った。

「へ、へへ、覇気がないって。へっへへ」

「雄也！しっかりして！ごめん春子、切るわ！」

ブツン！

しばらくして、雄也はゆっくりと起き上がった。そして蓮華は小声で言った。

「雄也、覇気が上がる方法教えよっか」

「おおお！！？ホントかああ！？？」

雄也は俄然やる気になった。人間は音の波のごとく、テンションにムラがあるものだ。

「それはね・・・」

ガチャ・・・

「まさか・・・、そんな殺生な・・・ウソン！」

体から血の気が消え、雄也は大根以上に白くなった。

「命を賭けて！ワタシの刀剣かたなから逃れてみなさい！！」

フォン、ヒュババツ

「逆に精神がゼロになるわ！バカが！」

蓮華はその一言でサタン状態になった。その刀剣の速さはもはや、音速の域に達していた。

「うおおおおっ！！」

「どわあああっ！！」

一晩中続いた訓練も終わり、気付いたら陽が昇っていた。

「で、ワタシと兵太郎呼んでどーしたんだい？」

「雄也にもう一度、豆腐を食べさせてあげて」

蓮華は訓練後の棒人形のような雄也を叩き起こし、春子と兵太郎を呼んでいた。

「ま、また笑わせてもらうことになるけどね」

雄也は渾身の力で、豆腐を一個食らい尽くした。すると、雄也の顔が笑顔になったではないか。春子と兵太郎は驚きを隠せず、言葉が出なかった。

「昨日はゲロマジだったけど、今日は格別に美味しいよ」

「どーよ、一晩中ワタシの刀剣かたなを避けてたんだよ。覇気が上がって当然じゃない」

覇気を上げる方法、それは命の危機である死線を何度も潜り抜けることだった。人間が妖刀を振りかざされまくり、妖怪が本気でくればまず命の危機には直面する。それを蓮華は利用したのだ。

「よし、腹もいっぱいだし学校へ行くぞお！」

「うん、それじゃまた今度ね春子、兵太郎くん」

勢いよく飛び出した二人を、春子と兵太郎はただただ見ていた。そして春子は、この腑抜けた時代にもああいうヤツがいるんだなと、強く感じた。

三節 遠方から友達（後書き）

本日の妖怪

磯女・・・九州地方に多く伝承されている海の妖怪で、性格は凶暴で狡猾。見た目は絶世の美女であることが多く、見とれた男の生き血を吸い尽くす。

豆腐小僧・・・山の中や森の中で現れる、豆腐を持った子供の妖怪。見た目に騙されて豆腐を食べると、体中からカビが生えてきて大変な事になってしまう。稀に豆腐だけがちょこんと出ている事もあるらしい。

四節 名所から自殺（前書き）

今回は真剣なバトル、文字数も多めです。

四節 名所から自殺

ある日、男は会社から解雇された。業績がいつも平均を下回っている、と言われたのだ。

「業績が平均下回ってる、なんてウソだよ。上の人間が、業績の数字を操作したんだ」

男は自分の部屋のパソコンを立ち上げ、あるサイトにアクセスした。

『楽しんで逝こう2011』

カタカタカタカタ・・・

『会社を上の人間の身勝手に、クビにされてしまいました。家族には逃げられ、親もない。死にたいので楽に逝ける方法、教えて下さい』

男は自殺しようとしていた。男は苦しんで死ぬのはイヤだという理由で、自殺サイトにアクセスしていた。すると、誰かから返事がきた。

「え？・・・竜鬼s?」

『石川の御堂寺みどうじという所に、くびれ灯籠とうろうという古い灯籠があります。その灯籠の前にある物をおいて、土下座をする。こうすると必ず死にます。ウソではありません、他の方々もこの方法で皆逝きました。ある物はこちらで用意しておくので、アナタは御堂寺に行ってみて下さい』

男はこれにノリ、石川県へ車を飛ばした。

早朝5時、雄也は剣道の稽古をしていた。蓮華も稽古に付き合い、一緒に汗を流していた。

「はっ！」

ドスッ！

蓮華の強い突きが、雄也の脇腹に直撃した。いくら剣道が強くても相手が相手、妖怪には敵わないということだ。

「うっ、あばら折ったかなコレ・・・」

「骨はそう簡単には折れないよ」

蓮華は汗いっぱいかいたその姿形なりで、雄也に手を差しのべた。当然のごとくと言っては難だが、見えてはいけなるところまで透けており、雄也はその手を振り払った。

「おいおいおい！透けてるよ、2つの李が透けてるよ！」

蓮華は自分の道着が汗で透けているのに気付き、雄也に気取らせる間もなく・・・。

スパパアン

しばらくして雄也たちは、朝食を若干気まずい感じで摂っていた。

『いや、最近多いですね。名所で自殺、なんて何考えてるか私に

「はわかりかねます」

「名所で自殺者続出、その背景にあるものとは！？、か」

「昨日は兼六園で5人が、今日の早朝にも石見銀山で2人が、しかも全員が首を吊つての自殺。これは一体どういことなんでしょうか？妖怪研究家の入江栄太いりえいたさん」

「この人、妖怪だよ」

蓮華は入江の顔を見て、静かに言った。

「ちよつと見えにくいけど、妖怪の印、赤い卍のマークが首についてるでしょ？」

「あ、ホントだ。若干見えるな」

妖怪にはある掟がある。それは人間と交流する時、必ず妖怪とバれないように首に赤い卍の印をつけることだ。この印の力で妖気を消しているのだ。

「でも蓮華にはついてないぞ？」

「位の高い妖怪は自分で妖気を消せるから、あんなの要らないんだ」

蓮華はえっへんと、威張り気味に言った。

「ボクの見解からして、これは妖怪くびれ鬼の仕業でしょう。そいつは自殺した霊が妖怪化したものであり、取り憑かれると心がモヤモヤして死にたくなるんです。川や自殺名所によくいるので注意し

たほうがいいですよ？しかし、くびれ鬼はずっと昔に封印されたハズ……」

入江の言ったことは本当である。明治の終わり頃、加賀の国の民全員が蜂起しくびれ鬼に立ち向かい、死闘の末封印に成功したのだ。

『封印されたということは、悪い妖怪だったんですか？』

『悪いなんてものじゃないですよ、だって自分の身勝手に2000人以上を死に追いやった残虐無比な妖怪だったんですから』

「あ、もう学校行く時間じゃないか。行くよ蓮華」

2人は大急ぎで学校へ行く準備をした。

その日の学校には情報の時間があった。と言っても自由時間みたいなもので、皆好き勝手にブログを見たり動画をみたりしていた。

カタカタカタカタカタ……ピッ

雄也の隣のたった一人を除いては。

学校が終わり、稽古も終えた二人はカップルっぽく手を繋いで帰っていた。すると、ある一人の人間とすれ違った。

「あの人は同じクラスの、五機いつはたあつま合馬くん？」

「合馬のヤツ、こんな時間にどこ行くんだよ？」

嫌な胸騒ぎを感じた雄也は、蓮華にバレないように高畑の後を付いていくことにした。五機は駅のほうへ早足で向かっていた。

「170円、新宿か」

雄也は五機に続いて、新宿まで切符を買った。電車に揺られ、2、30分ほど経って駅に着いた。

「今度は中央線？しかも東京まで・・・」

この時既に8時を過ぎており、五機は友達などと待ち合わせをしている様子も無い。ますます胸騒ぎがしてきた雄也は、今の全財産をはたいてでも友達の動きを知りたくなった。

「幸いだが、いつもの心配性が役に立った。10万あれば大半どこでも行けるぞ」

五機の後をそのまま付けていたら、いつの間にか石川県の御堂寺にいた。五機の目の前には灯籠と、牛の首があった。

「ある物って、牛の首かよ・・・まあいい、これで終わるんだ」

ザッ

五機は目の前で土下座をした。すると灯籠が勝手に動き出し、喋り始めたのだった。

「ヒヒヒ、アイツには感謝せならんぜ。オレを封印から解くための方法、アイツが人間どもにブワーツと広めてくれんだからな」

「く、くびれ鬼！」

灯籠からくびれ鬼が出てきて、雄也は思わず叫んだ。その叫び声に、

五機とくびれ鬼が気付いた。

「お？オマエも死にたいのか？否、そんな顔じゃなさそーだ」

くびれ鬼は死ぬ気など無い雄也に、さも邪魔者扱いする眼差しを効かせ妖刀を振り上げてきた。

「オレの邪魔すつと、ロクなことにはならんぜ」

ザクッ！

刀を間一髪避けた雄也だが破壊力は凄まじく、後ろの大樹を鮮やかに切り裂いた。くびれ鬼の刀の形は文化包丁に近かった。

「ヒヒヒ、動きはいいな。だが妖怪には敵うまい」

ブオウン

雄也は居合いの衝撃で体が浮き、身動きがとれなくなった。

「オマエもオレの退屈しのぎのオモチャになりな！」

ガキイヤン……

刹那、正義の白い炎が悪意に満ちた刃を弾いた。

「ヒヒヒ、これはこれは。悲劇の火天女様じゃねーの」

蓮華は雄也と同様に、バレないようにこっそり後をつけていた。

「五機くん、何でこんな場所で！こんなヤツなんかと会ってるの！？」

五機は口を開けなかった。が、その閉ざした門は一つの鍵で簡単に開いた。

「もしかして、あの事故か・・・」

「・・・！十三端、目敏めーゼテムエ。そうさ、あれだよあれ。事故つてされてあるが実際は違うのさ、だってオレが殺しちまったんだからな！！」

雄也は驚きを隠せなかった。2年前の中学の時、男子生徒が階段から落ちて亡くなった事故が、事故ではなく殺人だったのだ。しかもその犯人は今、自分の目の前にいる。

「あの時、オレとヤツは変なことで口論になって終いにや取っ組み合いになったんだ。それで階段に差し掛かって、オレがヤツを思い切り突き飛ばして殺したんだ。勿論、すぐに自首しようと思ったんだが周りには誰もいないし・・・。見てみぬフリをしたのさ、オレは。だが後から徐々に罪悪感が、自己嫌悪ってヤツが、オレの心を覆ってきたんだ。そしたらもう2年、軽いハズねーし人生終わりだ。だから！ここでこのバケモンの力を借りて、楽に死ぬんだ！！！！」

「何言ってるんだ！五機！オマエ、それで罪を償ったとかそんなこと思ってるんじゃないだろうな！？そんなのは、大、大、大、大、大、大間違いだぞ！！」

雄也が一喝した。が、その叫びも五機には届かなかった。そしてそのスキにくびれ鬼が襲ってきた。

「ふん、これから死ぬヤツにそんな言葉は無意味だぜ！」

グシャアア・・・

「う、ぐあ・・・」

なんと、くびれ鬼の凶刃を喰らったのは蓮華だった。大ダメージを受けても即反撃を試みるが、刀から炎が灯らなかつた。

「オレの妖刀、晒首ひくしびは斬った相手の戦意を絶つ変り種でな。けどオマエの刀とは都合がとてつもなくいいみたいだがな、ヒヒヒ！」

蓮華は動けぬ体を強引に動かし、刀を啜えて雄也にすり寄ってきた。

「これ白火花じゃないか！ボクに、人間に妖刀が使いこなせるワケない！」

「大丈夫・・・。雄也なら・・・、闘志に満ちた今なら・・・使えるハズだか・・・ら」

弱々しく、だが確信を持った蓮華の瞳を見た雄也は、首を縦に振った。

「ヒヒヒ！人間に！妖刀が！使えるかよ！」

「うあああああ！！！」

ポオオオウア！！

白火花に炎が灯り、幻想的な輝きを放った。くびれ鬼はそれを見て、ある感情を抱いた。恐怖と畏怖の2つである。

「切り裂け！白火花！」

ズドオオオオン！！

「ぞ、そんなあ~~~~うううう」

雄也の信念を持った白い炎が、心無き悪を跡形もなく焼き切った。雄也は勝った喜びに浸る暇は無かった。

「待つてる、救急車呼んでやる！」

「いいよ・・・、それより・・・刀貸して」

蓮華は刀を雄也から借りて、自分の傷に当てた。すると瞬時に、傷が治ってしまった。

「ふふつ、スゴイでしょ白火花^{これ}」

「それよりな、五機に言いたいことがあるんだ」

雄也は五機に、静かな怒りの眼差しを向けた。

「いいか、罪を償うってことはそんな綺麗ごとじゃないのはわかるよな。金なんかじゃ償えるワケないし、自分の命を捨てて償うことなんか、罪から逃げてる逃走中の犯罪者と変わらない。だったらどうすればいいと思う？」

「知るかよ！まさか被害者に人生捧げろって言うのかコラ！！」

五機は逆ギレして言い放った。

「いろんな方法はあるが、ボク的にはこれが一番じゃないのかなって思う。罪を償うには死ぬ事や多額の金じゃなくて、二度と罪を犯さないとの底から誓って、凜とし、胸を張って生き抜くことじゃないかって、ボクは思うよ」

五機の目には、大粒の涙が溢れていた。

翌朝、五機は石川県警に自首し逮捕された。罪は当然軽いものではなく、懲役20年の実刑判決を下された。しかし、五機はそれを快く受け入れた。

『ええ、私も驚きでしたよ。まさか2年前の事故が、殺人事件だったとは』

それから1週間、テレビは五機のニュースで持ちきりだった。雄也と蓮華は、そのニュースでヒーローとして盛大に扱われた。しかし2人の心中はグチャグチャだった。

四節 名所から自殺（後書き）

本日の妖怪

くびれ鬼・・・自殺した霊が妖怪化したもので、主に川にいる。取り憑かれると、心の中がモヤモヤして「本当に首を吊ってしまおうか」と思っただけで本当に首を吊って死んでしまう。ちなみにくびれとは、首を吊る『くびる』と言っ言葉からきている。

五節 悪魔から交渉（前書き）

学校からアップしております。

「おかしいよ、以津真天は元は餓鬼道にいる妖怪。人間道に来るなんて何十年に1回あるかないか、それにかなり臆病な性格なのに・・・。こうも人を襲うなんて考えられないわ」

「イヤイヤ流石、名門火天女一族だぬあ」

蓮華は後ろの声の主に、問答無用で切りつけた。が、その一太刀は簡単に止められた。

「ぐうう、熱い熱い。これが、サディストが言ってた白い炎の剣つてのはあ」

身長2メートルはあろうか、その巨漢は蓮華の妖刀を知っていた。

「おっと名乗るのがまだだったぬあ、オレは第67位悪魔のブリングどうあ。悪魔の中で今、高エネルギー体を集めるのが流行りでぬあ。さつき言ったサディストはオレより格上、第13位悪魔なんだずえ〜」

ブリングは蓮華の首を持ち上げ、締め上げた。要求はただ1つ、妖刀白火花を渡すこと。渡さなければこのまま絞め殺すつもりだ。

「うう・・・絶対・・・渡さない・・・から」

なら死ねと言わんばかりに、ブリングは蓮華の首を締め上げた。

「やめなさいブリング、その妖怪は味方ですよ」

パキン・・・

どこからともなく、声とスナップ音がした。と同時に、ブリングの手から蓮華の体が離れた。

「サデリスト、余計なマネをう」

2人の傍の電柱に、赤い髪と瞳の男がいた。

「私があるのは、蓮華さんだけです。他の方々は少し眠ってもらいましょう」

パキン！

男がスナップを再び鳴らすと、雄也やブリングを含め全員が眠ってしまった。

「私たちは貴方がた妖怪と同じ、闇に追いやられた種族なのをご存知でしょう。そう、人間の身勝手^{ヒト}によって。太古の地球には悪魔と妖怪、様々な動物がいました。その動物の中で進化し、誕生したのが人間です」

「一体何が言いたいの？」

蓮華は素朴な疑問をぶつけた。

「協力していただきたい、我々悪魔と貴方がた妖怪のために。とくに悲劇の火天女族には、私も怒りを感じています。人間と共に生きることを誓うが、人間の業に吞まれ絶滅に追い込まれた……。貴方も本当は人間を恨んでいるのではないのですか！？悲劇の火天女の最後の生き残りの、三島谷蓮華さん」

協力するということは、人間を滅ぼすということ。人間に、雄也の祖先に仕えていた蓮華は当然のごとくNOを突き付けた。

「風仙様も雄也も、ワタシたち妖怪を受け入れた！受け入れてくれる人がいる、それでいいじゃない！！」

男はため息をついて、後ろを向いた。

「仕方ありません、では帰らせていただきます。あ、自己紹介がまだでしたね。私は第13位悪魔、通称『冷血のサディスト』と言われていています。どうぞお見知りおきを」

パキン

スナツプを鳴らすと、眠っているブリングとサディストは煙のように消えた。

あの晩以降、以津真天はパツタリと姿を見せなくなった。元いた餓鬼道へ帰って行ったのだろう。

「なあ雄也、剣道教えてくれよ！オマエ強いだろ？」

「蓮華ちゃん！アタシたちに剣道教えて〜！！」

蓮華の勇志がかなりイケてたので、クラスの中では剣道ブームが巻き起こっていた。

五節 悪魔から交渉（後書き）

本日の妖怪

以津真天・・・飢餓に苦しみ飢え死にした人が見捨てられた後の成れの果て。見捨てた人に付きまとい、「いつまで」と悲痛な叫びを上げる。鳥の姿がほとんどだが、まれに獣の以津真天もいる。

今回の悪魔

ブリング・・・第67位悪魔。怪力自慢の巨漢で、喋り方が独特。格上の悪魔にもタメ口で喋るため『無礼のブリング』と呼ばれている。

サディスト・・・第13位悪魔。自分で物事に手を出すのを嫌い、『冷血のサディスト』と呼ばれる貴族出身の悪魔でどんな相手にも敬語で話す。スナップしただけで複数を眠らせたり、相手の神経を操ることができる。

六節 親友から敵に 忝（前書き）

1 話書くのに一苦勞、時間と知恵があればこの悩みなんて瞬時に消えるのに。

六節 親友から敵に 壱

交渉を断られ、手立てがなくなったサディストはある者の所へ行
った。

「やはり協力して下さいますが、磯女さん」

「そりゃね。アイツ人間に媚売って、自分だけ助かるうとしたなん
て……。妖怪として絶対に許せないことだよ!!!」

なんと蓮華の親友、春子の元へ訪れていたのだ。悪魔らしくウソを
並べ、見事に騙した。『蓮華は自分の命を守るために体を売り、火
天女への虐殺から逃れた』、と。しかし、サディストが春子の元へ
訪れたのはもう1つ理由がある。

「くははは、貴方がた磯女族は悪魔とのヤミ貿易で栄え、名門に成
り上がった。その貿易相手の主の長兄の頼み、逆らえるワケないで
すよね」

サディストは磯女の闇の部分ネタに、交渉を成功させた。

「ではまず、軽く人間を10人程度葬ってください。それで飛びつ
いて来るでしょう、あなたの元親友の蓮華さんは。恐らくあの妖刀
を使える人間も、オマケでついてくるでしょうけど」

「別にいいさ。アイツを匿ってるあの野郎も殺るんだし」

春子は奥から、自分の妖刀を取り出し海へ出た。

「うふふふ、アイツらはこの連休にどこ行くかはわかってるんだ・

。そこで殺人あつたら、アイツらすつ飛んでくるだろうねえ」

高校に入つての初連休、GWである。雄也と蓮華は2人で、横浜の中華街に来ていた。

「うわあ、杏仁豆腐でらつみゃ」

「さっぱりしてるな」

2人は中華街の全店の杏仁豆腐を、某星の戦士のごとく食べ歩いていた。少なくとも20件は回っている。そんなに食べて糖尿病にならないのだろうか・・・？そして2人はまた別の店に、ズカズカと入っていった。

ギィ〜〜〜ッ

「すいませ〜ん、2名杏仁豆腐2つ・・・ってあれ？」

その店は電気が付いて、営業中の看板も立っているのに中には誰もいない。2人は奥でスープやらを作っているのだろうと思い、席に座った。

ギィイツ

店のドアから1人の男が入ってきた。が、その様子はかなり衰弱していて今にも倒れそうだった。

「この人のエプロンに書いてある勇満亭って、この店の名前じゃないか！」

「店員さん？店長さん？もつとつちでもいいわ！何があつたんですか！？」

蓮華が男に触れた瞬間、男は跡形も無くなった。跡には白い粉が残つた。

「おい、これ塩だぞ。聞くのも難だが、これどんな妖怪がやつたんだ？」

雄也は白い粉を嘗め、蓮華に尋ねた。蓮華は小声でローテンションに答えた。

「磯女の仕業・・・、恐らく春子だと思う」

雄也は青ざめた。今まで一緒にダべつた者が殺人を犯したのだ。蓮華は雄也以上にショックが大きかった。

「妖怪つて心変わりが激しい種族なんだ、とくにワタシたち女の妖怪はね。少しまつかけができてしまえば、誰でも殺れるんだよ」

「・・・！海に行くぞ、春子はそこにいるハズだ！」

雄也は蓮華を引っ張り、九十九里浜へ連れて来た。神奈川の有名な海に關係あるものと言えば、江ノ島や九十九里浜である。とりあえず雄也は海に潜ろうとした。

「ダメ、磯女は海の妖怪の中でも上位の強さなんだよ。そんなのと海で闘り合つたら、雄也勝てるワケないでしょ？待ってて、今兵太郎くん呼ぶから」

ブルルルル……

蓮華はケータイで兵太郎を呼んだ。

「春子が……。仕方ない、この薬飲んでくれ」

兵太郎は懐から丸薬を取り出した。その丸薬には小さい文字で、海と刻まれていた。

「何10年振りだろ、この『海雪の白玉』を飲むのは……。あ、第二次世界大戦以来だ」

ゴクッ

3人は勢いよく海へ飛び込んだ。その泳ぎっぷりは魚でしかも、全く息苦しさが感じなかったのだ。

「あはは、気持ちいい！さすが兵太郎くん、すごい薬だよ」

「ホント驚きだ、と言ってもそうつかうかしてられないみたいだぞ」
雄也が指差した先には、磯女の手下たちがうじゃうじゃいた。フワフワした感じからして、妖怪しらみゆうれんの大軍だろう。

「気をつけな、オイラのこの薬は海の中で回遊魚に近い状態にする薬だ。回遊魚はずっと死ぬまで泳ぎ続ける魚、動きが止まったら海の中で海葬あげなきゃいけないから！」

ギユウウウン

雄也は2人の手を持ち、強引に大軍の中を突き進んだ。

「雄也すごい！泳ぐの得意なんだね！」

蓮華の褒め言葉と眩い笑顔に、雄也は頬をポツと赤くした。

「おやおや、相手は妖怪だぜ？なに赤くしてんのさ」

「ニヤニヤするな、気持ち悪い」

3人は磯女の根城と思われる、海底洞窟を見つけた。その中は何ともおどろおどろしい雰囲気が充満していて、今にも何者かが襲ってきそうな場所だった。

ピチャ・・・

「!?!」

雄也は背後の水音に気付いたが、後ろには誰もいなかった。

「雄也、どうしたの・・・？まさか・・・幻術!?!」

蓮華は雄也が幻術にかかったことを確信した。そして、幻術をかけた張本人を躍起になって探し始めた。かけられた雄也も幻術だと気付くには、あまり時間を要しなかった。

「くそ、今日は武器がない。一応空手や柔道はかじってるけど、あれらは基本裸足するもんだから屋外じゃ力を発揮しづらい・・・。周りは尽きぬ海水、ここは化け物の根城。逃げる選択肢は消えたワケだよ・・・な!?!」

ヒュオオッ

雄也は背後からの攻撃を間一髪かわした。落ちた髪の毛が、そのギリギリさを物語る。

「あんたもしらみゆうれんか？にしては随分形が整ってるじゃないか」

「オレはもともと大名の息子でな、特別に磯女様の術で人の形をとらせてもらっているのさ」

しらみゆうれんは端正な顔立ちと、戦争の傷跡が数多くある生々しい肉体をしていた。

「こんな小僧を斬らねばいかんとは、現世いまも怖い時代だな」

「そう易々斬られる男には育ってないぞ！」

ガシィイツ

雄也は瞬時にしらみゆうれんの懐に飛び込み、柔道の寝技『袈裟固め』をかけた。その威力は凄まじく、脇を締めたらしらみゆうれんの手から刀が離れた。

「むぐお・・・、何て小僧だ」

「このまま気絶させてもいいんだけど、どうする？」

しらみゆうれんは雄也の言葉に、妖怪ナメんなと鼻で笑った。

モワモワ〜

その瞬間、周囲が白い靄で覆われた。靄が消えた後、状況はとんでもないことになっていた。

「ウソだろ・・・？靄に化ける能力なんて、さっきのヤツらは持つてなかったのに」

「ははん、一応強化されてるからこういう術も使えるってだけだよ」
なんと地べたについていたのは、雄也だった。しらみゆうれんは雄也の言ったとおり、靄に化けて雄也の不意を突いたのだ。見事に関節が極きまつてるので、微動だにできない。

「そう言えば、アンタの御主人様大丈夫か？仲間に弱点教えたから、もう倒しちゃってるんじゃないかなあ〜？？」

雄也はハツタリとは呼べない、まさにバカとしか言い様がない言葉を放った。こんな言葉に引っかかるバカはいないと、雄也は思ったのだが……。

「なつ、オマエ自分を困にして！」

パツ・・・ドスツ

しらみゆうれんが手を離れた途端、手刀で一発。雄也は心の中でバカだな〜と、侮辱を込めて思った。

「う〜ん、幻術は解けないか。春子を早く止めないと、ここで死ん

でしまう……。蓮華に兵太郎、春子を止めてくれ……。！」

雄也とはぐれた2人は、春子と激戦を繰り広げていた。が、その戦況は悲惨なものだった。

ゴボボボ……

「うふふっ、海でワタシに喧嘩を売る時点で敗北決定だよ」

六節 親友から敵に 吉（後書き）

本日の妖怪

しらみゆうれん・・海の妖怪、というより海で亡くなった人の幽霊。靄のような姿をしており、船などに絡み付いて動きを止めるなどの悪戯をする。

七節 親友から敵に 弐(前書き)

学校からまた投稿。

七節 親友から敵に 弐

GW中に中華街へ行った2人を待っていたのは、磯女はるこによる連続殺人だった。それを止めるべく、兵太郎も呼び磯女の根城へ向かったが、幻術にかかり分断されてしまった。雄也は機転を利かせて磯女の部下を倒すが、蓮華と兵太郎は磯女との闘いで絶望の淵に立たされていた。

「うふふ、ワタシの妖術『水玉籠すいぎみくろ』は相手を妖気に満ちた水に閉じ込める術。磯女族に伝わる、水妖殺しの術さ。海で最強と謳われるのは、この術のおかげと言ってもいいくらいだよ」

人と妖怪は、体のつくりが酷似している。つまり、2分以上酸素を得ないでいると妖怪も酸欠で死んでしまうのだ。

「もう10分は経ってる、とっくに酸欠で逝っちゃってんだろ・・・」

磯女は術を解き、2人に近づいた。

ガシッ・・・

かろうじて意識があった蓮華は、弱った体の力を振り絞って磯女の足にしがみ付いた。

「気絶してしまえば、脳は保存される状態になって酸欠になるってことはないんだから・・・！」

「この阿婆擦れエ！一族を殺しても生き延びたオマエに、妖怪を

名乗る資格なんてないんだよ!!」

ドガッ

磯女は蓮華を前へ蹴飛ばし、刀を奪った。

「春子、アンタ何吹き込まれた・・・の？」

しばらくして、兵太郎も目を覚ました。

「春子、それは断じて違うぜ。火天女一族が滅亡したのは確かに、人間の業が招いたことだ。でも蓮華の母君は、それを察知して自分たちのたつた1人の娘を逃がしたんだ。風仙様と自分の間に生まれた、半妖の蓮華をな！」

「な、蓮華が半妖!? 風仙様の記録には書かれてなかったよ!？」

書かれていなくて当然である。当時、人間と妖怪は共存派と反共存派に分かれていた。もし半妖が生まれたと知れてしまつたら、反共存派の手に墜ちる危険が出る。それを悟つた十三端風仙は、記録に蓮華を成したことを残さなかつたのだ。この事実には驚いたのは、当の本人だつた。

「ワタシ、半妖だつたの・・・? でも何で、兵太郎くんが知ってるの?」

「オマエの母君の日記を見ちまつた、悪気は無かつたんだが。小さいときに悪戯で、日記をこっそり見たんだ。それには蓮華の成長の記録が、ぎっしり書かれていたよ。徐々に半妖の匂いがしてきた、早く私の血を、妖怪の血を飲ませなければ・・・。その矢先に

人間が虐殺始めやがったってワケさ」

春子はここにきて、自分が騙されていたことに気付いた。が、状況は精神を後へ引けないところまでいってしまっていた。

「うあああつー!」

妖力チカラが完全に解放され、本性である半魚人の姿を現した。より美しく、より禍々しくなった磯女は2人に襲い掛かった。

「きええええつ!」

バギイイイ・・・

「・・・?・・・ゆ、雄也!？」

空前絶後、磯女の拳が蓮華に当たる直前に雄也が前に飛び出し、その一撃の全てをまともに喰らったのだ。そしてさっきの鈍い音は、雄也の腕が砕けた音だった。

「何度喰らっても慣れないな、骨折つてのは。幸い右は無事だ」

雄也はさきほどの戦利品、しらみゆうれんの妖刀を片腕で担ぐように持った。

「ふん!ワタシの妖刀ようとうつみなり海鳴の力を見るがいい!!」

磯女は刀を一振りした。すると轟音が響きわたり、水の塊がドツと中に押し寄せた。

「ちい、海流をこの中へ行くよう仕掛けやがった」

兵太郎は2人を抱えて、退水のきみずの術を唱えた。退水の術は一定時間、水の中をまるで鳥が空を飛ぶかの如く速く動けるようになる術だ。

「退水などと小賢しいマネを！」

磯女は海上に上がるうとしてしている兵太郎を、鬼の形相で追いかけた。蓮華も術を唱え、磯女を撒こうとした。

「えんつくれぬいのまなこ炎光紅眼！！」

カアアッ

「しまっ、この術は・・・！」

蓮華の使った術、炎光紅眼は磯女の使った幻術と原理は同じである。しかし、磯女のは音で相手をハメるもので大して強くないが、今回は視界で相手をハメるものなので幻術の力が強いのだ。

磯女はまんまと幻術にハマリ、幻術の世界を彷徨っていた。

「うつつ、アイツら・・・！こんな場所とこ、さっさと出てやる！」

しばらくして、磯女の目の前で突然強い光が発生した。そこには蓮華たちとの日々が映っていた。

『やったあ！どうよこの羽織、カワイイでしょ！？』

『そう？ワタシの方が綺麗だった』

これは春子の昔の記憶、自分たちの作った羽織を互いに自慢した時のシーンだ。

「そう言えばあの後、兵太郎が泥を悪戯で投げ付けて羽織が台無しになったんだっけ」

そして今度はお祭りでの1シーン。

『金魚上手くとれないよ』

『貸してみな、行くよ』・・・それっ』

金魚を上手くとれない蓮華に代わって、店の金魚を全部とった記憶。

「こうして見ると、蓮華が半妖だって、人間の血が流れてるんだってわかる気がする。お祭りとか、そういうの好きだったもんな」

春子は自分も気づかぬうちに、涙を流していた。

「今更かもしれない、でもやっぱり間違ってるよな・・・ワタシ」

春子は元の姿に戻った。その姿は可憐で、さっきまで暴れていた怪物にはとても見えなかった。

「ごめん蓮華、ごめん・・・」

「「「いいよ」「」」

3人は友の過ちを快く許した。もし自分でも、そうしただろうから。

「ハイハイ、そんな感動シーンは要らないですから、死ね」

サディストは一行の背後をとり、手下の悪魔に攻撃を指示した。

「グギャアアアツ」

「何だあの悪魔！？つてか悪魔じみた獣はあ！？」

その悪魔は獅子のような容姿で、青い鎧を全身に付けていた。位が3桁以下の悪魔は言葉を発さず、上位の悪魔に使役されるのがほとんどなのだ。

「第211位悪魔ドウボロウ、水中戦では無類の強さを誇ります」

サディストは場をドウボロウに任せ、スナツプして瞬時に消えた。

「あのさ、これで何とかなんないか？」

雄也は懐から、さっきの刀を取り出した。雄也は剥き出しの顔面に刀を刺せば、一撃で倒せるのではと考えた。しかし、ここは海。自分の息も長く持たない。雄也は残り少ない時間の中で悩んだ。

「それならいい手があるよ、貸しな」

春子は刀を闇雲に遠くへ放り投げた。

「オマエ勝手に！」

雄也は怒るが、春子は続ける。しかし、春子の作戦は自身の刀を活かした見事なものだった。

「妖刀海鳴！ 『たいはてんらくのしん大波天落刃』！」

春子の妖刀は海の流れを支配する。つまりさっきの刀を、相手の急所に当てることも容易なのだ。

ズドツ！

「ゲギヤアアア・・・」

ドウボロウは顔面に刃が当たり、煙のように消えた。そして一行は陸に上がった。

春子は陸に上がった後、ずっと黙り込んでいた。

「春子・・・」

「なに・・・？」

周りもどんよりとした空気だった。しかしこの場面を兵太郎がぶっ壊した。

「おいおい、こちら辺にメイド喫茶があるんだとよ！ おおお！？ 女子はコスプレおKてあんぜ〜」

「誰が行くか！」

ゴン！

こうして、皆いつも通りの空気に戻った。

七節 親友から敵に 弐（後書き）

今回の悪魔

ドウボロウ・・・獣型の下級悪魔。基本的に位が3桁の悪魔は、上位の悪魔に使役される。サディストが持つ30体の悪魔の1つであり、水の中を速く泳ぐ事ができる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0336q/>

柵から大明神

2011年8月9日21時51分発行